グリーンの短篇小説

矢　野　道　夫（外国語研究室）

Michio YANO

The Short Stories of G. Greene

グリーン（Graham Greene, 1904—　）の短篇小説は今までのところ余り多くはない。1954年に出た短篇集「21の短篇」（*Twenty-one Stories*）がその殆んど全部であるといってよい。尤も彼はこの集で以前の集と比べ，新しく4篇を追加した代りに2篇を引込めているし，その他全く短篇集に收録されなかった作品も若干あるらしい。[①] 併しこの最近刊に載せられていないものは作者の側に於ける何等かの不満を意味するもので，我々は今敢てそれを取上げる必要はないであろう。こゝではこの「21の短篇」を定本として若干の考察を進めたい。この短篇集では各作品は制作年代を無視して配列されているが，今それを年代順に並べかえてみるなら次の如くになる。

1929 … *The End of the Party*; *The Second Death*
1930 … *I Spy* ; *Proof Positive*
1935 … *A Day Saved*
1936 … *The Basement Room*; *Jubilee*; *Brother*; *A Chance for Mr. Lever*
1937 … *The Innocent*; *A Drive in the Country*
1938 … *Across the Bridge*
1939 … *A Little Place off the Edgware Road*; *The Case for the Defence*
1940 … *Men at Work*; *Alas, Poor Maling*
1941 … *When Greek Meets Greek*
1948 … *The Hint of an Explanation*
1954 … *The Blue Film*; *Special Duties*; *The Destructors*

即ち1929年から54年に至る26年の長期に亘り乍ら，その数は甚だ少いといえる。これはグリーン

が長篇に主力を注ぐ作家であることを物語るであろう。彼は1947年の「19の短篇」に次のような覚書をつけた。

「1929年から1941年までの間に，時たまに書かれたこれ等の短篇の欠点を私は知りすぎる程知っている。短篇小説は私が本式に練習を積んだことのない骨の折れる形式である。私はこれ等を長篇作家生活の副産物として提供するにすぎない。」

以上の言葉は成程短篇には余力しかかけられていないことを示すであろうが，それは「副産物」であり乍ら骨の折れる（exacting）作品であったことを物語っている。一篇一篇が彫心鏤骨の結晶であって，たとえそれが失敗作であったとしても，我々はそこに苦心の跡を見ることが出来る。そして事実珠玉の短篇と称すべきものが幾つかあるのである。

グリーンの短篇を取扱うにはその制作年代に従って，出来れば書かれた当時の環境，作者の心理等にまで立入って検討して行くのも一つの方法である。だがこれは短篇をあくまでも長篇の「副産物」として見ることになろう。ここでは短篇を一つの独立したジャンルと考えて，彼の短篇が長篇と如何に異るか，長篇に盛りこんだ主題が短篇に於ては如何に現われているか，或は現われていないか，短篇にだけ現われた傾向は何か，等を考えてみたい。その際，彼の短篇をその内容からみて6つの項目に分け，制作年代や長篇との関連を考慮しつつ検討をすすめる方法をとった。

(1)　神

グリーンは1926年にローマ・カソリックに改宗した。この重要な事実が彼の作品の上に明瞭に姿を現わすのには若干の時日を要した。それは長篇では10余年後の *Brighton Rock*（1938）からである。併し1926年以後の彼の描くすべての人間は（彼の最初の短篇は1929年発表）カソリックの神につながっている，——どんな悪党も，臆病者も，失敗者もすべてグリーンの眼からは神との関連に於て見られている筈である。この意味に於ては以下にあげた5項目はこの項と対立するものではなく，実はこの「神」に帰一することも可能である。

グリーンがはっきりと神乃至宗教を取扱った短篇はやっと3篇数えることが出来るにすぎない。この数が意外に少いということは，実は神の問題が短篇形式に如何に不適当であるかを物語るであろう。然もこの3篇の中正面から神と取組んだものは1篇しかないのである。まず一番時代の早い *A Chance for Mr. Lever* は一読したところでは神の否定の様相を呈している。リーヴァー氏は不景気の為退職金までなくし，今や食う為，又愛する妻の為に働かねばならぬ。彼は現在アフリカのリベリアに来ている。彼に与えられた仕事は，ある商社の粉砕機を売り出す為にディヴイドソンという男（リベリアで金を掘っている）からその機械の証明書を得ることである。彼は困苦と旅費の欠乏に悩み乍らも妻にあてて嘘まじりの優しい手紙をかきつける。併し彼の全運命はこの仕事にかけられている。若しディヴイドソンに逢えなかったらどうしよう。ところがそのディヴイドソンは死んだという土人の噂もある。彼は思わず祈る，「おお，神よ，ディヴイドソンを死なせないで下さい，唯病気である丈で私が来たことを喜ぶようにさせて下さい」。彼は重い荷物をかつがせ，土人を督励し乍ら密林の道を辿る。その密林は生長しているのでなく，死んで行きつつあるようなリベリアの密

林である。ディヴイドソンが来ている形跡は確にあった。だが，悲しい哉，彼は意識を失って瀕死の床にある。黄熱病だった。彼は黒い物を吐き乍ら冷くなりかかっている。リーヴァー氏のなす事は唯一つ，ディヴイドソンから証明書を得ることに失敗したと報告することだった。併しそれは彼の人生，妻との生活の崩壊であった。彼は道徳も誠実もすてて一個のアナキストになる。彼はそこにあったタイプを使って証明書の偽造を始める。彼はもう何物も怖れなかった。この偽造文書で金さえ手に入れたら……。帰路につき乍ら彼の夢は果てしもなく拡って行く。だが悲しいことに，黄熱病のディヴイドソンを刺した一匹の蚊は又リーヴァー氏をも刺していた。作者はこうつけ加えている「ディヴイドソンを倒した蚊がリーヴァー氏の踝をかんだことを知って居られる読者諸氏は，慈悲深い神様が人間の弱さを憐んでリーヴァー氏に3日間の幸福感を与えられたのだ，と信じられるでしょう。そしてこの話をきいて，若しリーヴァー氏が今あのように嬉々として辿りつつある単調空虚な森林，何等の精神生活も信ずることが出来ないあの森林を私が身をもって知って動揺をうけていなかったら，あの慈悲深き全知なる神への私の信仰もさぞ強化されたことでしょう」（大意）要するに，作者は善良なリーヴァー氏の勝手な祈りをききとどけて3日間の幸福を与えるような神は一切信じないと云っているのだ。グリーンが身のまわりで万物が死んで行くように見える荒涼たるリベリアの大自然の彼方に見た神は，ささやかな人間の善とか悪とかを超越した神であった。この作品は彼のアフリカ紀行の産物であるが，彼が神を問題にした第一声であったといってよい。但しその神は裏から，云わば逆説的に提起されている。

これに反して12年後に出た *The Hint of an Explanation* は表から肯定的に神の存在を示そうとする。10才の少年デイヴイドは父の命令で毎日曜，法衣を着てミサを勤めさせられるのが大嫌いだった。ところが，彼の小さな町に容貌醜悪で自由思想家と称するパン屋のブラッカーが居て，このデイヴイドを誘惑し堕落させようとする。そうすることによって彼はカソリックに対して巧妙悪辣な復讐計画を立てていた。彼は高価な玩具の汽車を使って根気よくデイヴイドを手なずけ，遂に聖餅を食べずに持ち帰ることを承諾させる。次の日曜日おびえ乍らもデイヴイドは指示された通り聖餅を持ち帰って寝室におく。その窓辺まで忍んで来たブラッカーの合図の口笛をきいた時，始めて少年は悟る。「この寝台の傍においてある物は，何かしら無限の価値ある物，それを失えば心の平和のすべてが失われる物である」と。ブラッカーの哀願と脅迫からその物を護る場所は一つしかなかった。彼は急いでそれを口の中に呑みこんでしまう。悄然として立去るブラッカー——それは悪魔がその不可避的な敗北の為に泣いている姿であった，と作者は作中人物に語らせている。少年は成人して司祭となる。ここには少年時代の堕落が反って神の認識への端緒となった例が語られている。グリーンの「失われた幼年時代」は人間存在の必然的過程として捉えられるのが普通であるが，ここでは「失われなかった幼年時代」という稀な場合が描かれている。これはカソリック的であるかもしれぬが非グリーン的である。この司祭はこのままで果して「幸福な男」であろうか？　追われる者（少年デイヴイド）の追う者（司祭デイヴイド）への転換がこのようにスムーズに行われるであろうか？　しかしそこまで立入るのは短篇の埒外である。ここに短篇の限界がある。尚同年に出版された *The Heart of the Matter* の中で，グリーンが同じ事に言及していることは注目に値

する。そこでは，6才そこそこの幼女が40日間もボートで漂流し，さんざん苦しんだ揚句死んで行くことを，神の愛とどう調和させるかについてスコッビイは悩む。それに対し傍にいた士官が「それは一緒にボートにいた大人達に何かしら考えるべき問題を提供したのだ」という。そして作者の言葉「それは余りかすかで捕捉し難い説明のヒントのようなものだった」が次に続く。併し，この説明のヒントは幼女の苦しみと神の愛については何一つ説明していない。この「説明のヒント」という句を表題にして，グリーンは「神の存在」ということを堀り下げて見たかったのであろう。だが，所詮短篇は「ヒント」しか与えられないのである。

次に来る *Special Duties* は神というより直接には宗教を問題としている。しかもカソリックのある面への痛烈な非難である。フェラロ氏は祖父の代からロンドンに住みついて成功した実業家である。彼の妻はジエズイットやドミニカンの僧を家にひき入れて毎日を最後の日であるかの如き生活をしているが，フェラロ氏も又自分の死後の生活に自分なりの救済の道を講じていた。彼は30才前後のソンダーズ嬢を副秘書に雇って特別任務を与えていた。それは教会を歴訪して煉獄で過す時日の赦免（indulgence）を求める仕事だった。彼女はその仕事に対して極めて適格の経歴を持つ修道尼であった。彼女が来て3年この方，獲得させた赦免日は36,892日にも上っている。フェラロ氏は或る日偶然にもこの秘書の仕事ぶりをチェックして見ようと思い立つ。そこで彼女の行っている筈の教会を探したが，そんな教会はどこにも存在していなかった。ショックを受けたフェラロ氏は自宅に引返し，今度は彼女が母と暮している筈の家へと出かける。そこで彼の見たものは，若い男に抱きよせられるソンダーズ嬢の姿であった。この完全な裏切に逢って悄然と帰るフェラロ氏。併しこの打撃から彼は立直る。彼は祈る人の身振りで指を組み合せたが，それは彼にあっては決断を意味していた。「明日から本当に信頼出来る秘書を探しはじめよう」と彼は考える。ここには修道院への直接の諷刺があるであろうが，人間の持つ信仰心という問題は根強く残っている。我々はこの短篇の中に，カソリック信者としての自分の足下を見ることを忘れぬグリーンの眼を感ずべきだろう。以上の外に神を扱った作品を強いてあげるならば，少年の可憐な神への願いが叶えられぬ *The End of the Party*，死には無意識さえもないという恐怖を描いた *The Second Death*，魂と肉体の関係を述べた *Proof Positive* があるが，これ等はすべて1929年から30年にかけての初期の作品であって，神に言及しているというよりむしろ当時の心理主義の影響を受けた習作であると断じたい。要するに「神」は短篇に導入するには余りにも大きく且複雑な問題であって，これは短篇という形式の限界を如実に物語るものである。

(2) 裏　　切

グリーンの作品には屢々 betray とか treachery とかいう語が見出される。又彼の処女作 *The Man Within* は裏切小説といってよい程裏切に満ちた男の物語である。人間はその本性上人を裏切るし，又裏切らざるを得ないのである。たとえ裏切らない場合があっても，その人は他の人から裏切られるのである。[2] 裏切こそ人間に与えられた宿命である。併し人間はこの裏切への認識によって始めて神に近ずくことが出来る。グリーンがその処女作以来陰に陽にこの問題と取組み，遂に *The*

Power and the Glory に於て神への裏切を取扱う最高の文学を生み出したことは前拙稿[③]に於て述べた。併し乍らこのように肉体と魂，或は魂と魂の相剋を描いてその帰趨を見きわめることは紙数の限られた短篇に於ては不可能事に属する。グリーンの短篇に於ては裏切は当然の事実として投げ出されているに過ぎない。*A Drive in the Country* に於て「彼女」は一体何故一晩の中に2回の裏切をしなければならぬのか？　彼女の父はある会社の係長をしていて，15年後に自分の物になる安普請の家に手を加えつつ，細々とつつましく暮している。こうした両親を異邦人（strangers）と観ずる彼女はよく知りもしない失業青年フレッドに一生を与える為に家出する。フレッドは働こうにも適当な職がなく，家から一週10志貫ってぶらぶら遊んでいる失業青年だ。そして彼女に深い愛情があるわけではなく，唯退屈から逃れる為の死の道連れとして彼女を選んだにすぎない。*Brighton Rock* の少年ピンキイのヴァリエイションである。この作のフレッドも又，盗んだ車で田舎へドライブした後，彼女に心中を拒否されて自分一人で自殺を決行する。一方フレッドの申出を拒否してやっとの思いで逃げ帰った彼女は翌朝父が起きるのに辛じて間に合う。結果的に見れば乙女心の反抗心から来る火遊びを描いたことになるわけだ。その点グリーンらしからぬ凡作と云われても仕方がないであろう。併し一体何故この未成熟の色の黒い娘は平和な家庭を裏切り，そして次には愛する男を裏切って逃げ帰らねばならぬか？　我々はそこに裏切を人間の宿命とみているグリーンの眼を感ぜざるを得ない。この場合には若い二人の間に神は存在しなかった。若し二人がカソリックの洗礼を受けていたらどうなるか。それを描いて見せたのがこの作の翌年に出た *Brighton Rock* である。従ってこの短篇はその習作乃至副産物とみられるべきものであろう。

1954年の *The Blue Film* は作者の筆も円熟して佳作と云ってよい。最後の裏切という一語がよく利いて，読者はある夫妻の長い不幸な結婚生活を髣髴として心に浮べることが出来る。末尾に作者はこう書いている，"It seemed to him that he had betrayed that night the only woman he loved."（彼はその夜たった一人の愛する女を裏切ったような気がした）「その夜」とは長年連れ添たっ妻を久しぶりに歓ばせてやった夜である。たとえそれが遠い昔の意識下の女であったにせよ，妻を歓ばすことがその昔の女への裏切りとなるような結婚生活の様相をこの一文は見事に浮彫にしている。*The Basement Room* も又，裏切ること，裏切られることをテーマにしているが，それが幼年時代に属するものであるから次の項で検討したい。

(3)　失われた幼年時代

「失われた幼年時代」（lost childhood）とは，幼年時代の不幸な経験がその人の一生に影響し，時には致命的な打撃を与えることを意味している。ＡＥの詩の一句からとったこの語をグリーンは自分の評論集の題名にまでつけた。注意すべきことは，この「失われた幼年時代」とはグリーンにあっては人間の成人過程の段階として解されるのであって，若し幼年時代に傷痕を持たぬ人ありとすればその人の思想は無知な 'baseless optimism' となるであろう，ということだ。そしてこの「失われた幼年時代」から立上るには神を必要とする，というのがグリーンの主張であろう。神なき所に立直りはない。それは完全な破滅をもたらすことが起り得る。7才の子供が幼年時代に垣間見た

大人の世界に絶望して，遂に一生を棒にふってしまう事情を描いたのが「21の短篇」の冒頭にかかげられた力作 *The Basement Room* である。

フイリップは両親が旅行に出た為，召使のベインズ夫婦と3人丈でとり残される。父母が出発するや否やフイリップは生き始めた（began to live）。父に従ってアフリカの沿岸地方で黒人を40人も使っていたベインズは男の中の男に見えたし，そのベインズが自分を子供扱いにせず対等の大人として扱ってくれるのが嬉しかった。フイリップは「これこそ人生だ」と思う。併しその期待も空しく，彼は直ぐ大人の持つ秘密にまきこまれてしまう。ベインズは若い愛人に逢っているところをフイリップに見付けられて，細君に默っていてくれと頼む。彼は承知するが，併しこの秘密は既に彼を大人の暗黒面にまきこんでしまった。しかも彼はこの秘密を思わぬことから細君に曝露して，ベインズの信頼を裏切ることになる。フイリップの折襟から菓子の一片をつまみ上けて，間食をしましたね，という細君に「あの人達がくれたんだ」（They gave it me.）とフイリップは抗議して口走ってしまう。これは彼の思わぬ無意識的な裏切であったが，これは彼を次の意識的な裏切へと否応なく追いこんで行く。今度は夫の秘密を知ったベインズの細君が彼を秘密にまきこもうとする。彼女は高価な玩具を餌にして，自分がみんな知っていることを夫に云ってくれるな，とフイリップに頼む。彼はこの依頼を承諾しないが，彼女への，否大人全体への不信と憎悪が次第に頭を擡げる。そしてその翌晩に起ったベインズとその愛人対細君の喧嘩，そして細君の投身自殺はフイリップの大人の世界への期待を完全に粉砕してしまう。ベインズは自分を裏切った，決して細君を恐れぬ男一匹でもなければ，秘密を持たぬ立派な人間でもない，従ってどうして自分が彼を裏切っていけない理由があろうか。これが幼いフイリップの論理である。彼はベインズの無言の懇願を無視して，警官の前で一切をぶちまける。This is life で始った期待は今や This was life という絶望に変り果てた。その後彼は一切の大人との交渉を断念し，利己主義者として自分の殻の中にとぢこもり，60年の生涯を無為の中に終ったのである。

このように「失われた幼年時代」がその人の一生に猛威をふるうとすれば，*The End of the Party* の中の生き残った双子の兄，9才のピーターや，*I Spy* の中で母の寝息をうかがって煙草を吸いに階下に降りて偶然にも，逮捕されて行く父の姿を見た少年チャーリーの行手にはどのような未来が待っているのであろうか？

幼年時代を扱って異色があるのは *The Innocent* である。街の女を伴って主人公は霧深い故郷の町を訪れる。そこで発見したものは，自分が30年前の7才の時にかいた美しい熱烈な恋文である筈のものが，実は未熟な猥画にすぎなかった，という話である。しかし，と主人公は反省する。「私はあの時，独特な美しい意味をもった何かを描いていると信じていた。あの絵が卑猥に見えるのは30年という人生を送った後だからに過ぎない」と。幼年時代は大人の考えるような無邪気なものではないが，それはやはり無邪気であることには変りはないのだ。この作品には「失われた」幼年時代が姿を現わさないかに見えるが，そうではない。必然的な別離が始めから予想され，決して満されることなき幼年時代の恋の傷痕は今，37才にもなって売春婦をつれて故郷を訪れる男の姿となって現われているのである。このうらぶれた男が懐旧の念にかられ乍ら，霧の田舎町をうろつき，遂に

上のような発見をするというこの物語は短篇として絶妙の佳品であるといってよい。

(4) 恐　　怖

グリーンは追想記 *The Lost Childhood* の中で，既に10才にして *King Solomon's Mines* の中の妖婆ガグールの恐ろしい姿に魅せられたこと，又学校では悪魔の化身のようなカーターという男にいじめ抜かれたことを述べている。彼にとってこの世の悪が与える恐怖こそ幼時からの固執観念であった。前に言及した最初期の作品 *The End of the Party* と *The Second Death* が二つ共恐怖をテーマにしたものであることは決して偶然ではない。恐怖は臆病を予想する。この臆病によって次々と裏切を重ねて行く男を扱ったのが処女長篇小説 *The Man Within* であった。他に恐怖を扱った短篇として *A Day Saved* と *A Little Place off the Edgware Road* がある。前者は「私」即ちロビンソンなる人物の独白体でかかれている。ロビンソンは名前も分らぬ男をつけて歩く。そして必要とあらば殺そうと思っている。相手が持っている何かが欲しいのだが，それが何であるかも，又何故自分がそれを欲しがるかも解らぬ。その解らないということが彼の恐怖となる。相手が飛行機にのって一日節約した為遂に殺す機会を逸するが，その節約した一日が最後には自分が苦しんだように，その男の絶望の日となれかし，とロビンソンは祈る。ここには恐怖と絶望と憎悪がある。何かを求めて得られぬ苦しみが散文詩風にうたわれているが，小説としては失敗であろう。

後者も又，恐怖と憎悪を扱う。夏の雨の中をクレイヴンは自分の肉体を憎むもののように引きずって歩く。彼の夢に3度現われた光景は，地下にあって決して腐敗しないで復活を待っている死体の群だった。彼は厭うべき自分の肉体がそのまま復活するという考に堪えられない。彼は場末の映画館に入って行くが，そこで奇妙な小男に隣に坐られる。彼はその男の訳の解らぬ独白をきき乍ら，それと比べて自分はまだ正気なんだと安心する。併しそれも束の間，そそくさと出て行った隣の小男が実はその日惨殺された人間だったことが判る。「俺は正気だ，気狂いにはならない，ならない」と叫ぶ彼の周囲に人が集り，やがて警官がやって来る。1930年代に出た以上の二作は極度に心理主義的作品であるが，成功作とは考えられない。グリーンの中に尚 Huxley や Joyce の影響が残っていると見てよいであろう。何故なら年代が進むと共にグリーンは本来の story-teller へと脱皮して行くからである。

(5) 滑　稽　味

便宜上この項目の下に humourous なもの，comic なもの satiric なものを含めて考えて見ることにする。グリーンの短篇には滑稽味を基調とするものが幾つかあって，それが彼の長篇と異る一特色となっている。が彼はそうした短篇に於て果して成功しているであろうか？ Alas, Poor Maling はユーモアを狙った典型的なものである。メイリングはある会社の秘書という現在の地位以上のものを望まぬ善良な男であるが，彼は腹鳴という奇病にかかっている。彼の胃は不思議にも音をきき覚える耳を持っていて，その音を食事後思いがけない時に発するのである。その現場に立合ったことのない医師達は消化不良といって片付けてしまう。併し彼の腹は会に出ればとんでもない音楽の

一節を奏したり，会議の最中にタイプの音を出したりする。遂々9月3日の開戦記念日に彼は大失敗をすることになる。独軍の大空襲が予想されるこの日会社の重要会議が開かれたが，社長の演説最中にメイリングの腹は空襲警報を唸り出した。警き慌てて書類をかかえて地下室にとびこむ重役連。それを捉えて，間違いです，私のおなかの故です，とどうして云えよう。彼は誰でもがするであろうことをした。即ち，彼も後から地下室に降りて，今度は警報解除のサイレンを腹が出してくれるのを待った。併し彼の希望は空しく，遂に会議は12時間も中断されたのである。この日以後彼はふっつりと姿を消した。恐らく傷心の身を何処か地方へ運んでそこで死んで行くであろう。と語り手は註している。ここには何かお伽話にでも出て来そうな牧歌的なユーモアさえ感じられる。そして作者の筆は円熟して巧妙である。併しこのユーモアの中に何かほのぼのとしたものを少しでも感ずる人があるであろうか？異常な運命に弄ばれる人間の姿が描かれ，何処にも救いはない。その点グリーン的であるとは云えようが，作品のムードとはおよそチグハグなものを感じさせられる。恐らく戦時下にあるグリーンの筆のすさびに過ぎないであろうが，作品としては失敗である。*The Destructors* にもユーモラスな所が随所にうかがわれる。爆撃をうけた廃墟に臨時の駐車場が出来，その傍にOld Misery と呼ばれるトマスの家が一軒傾きかけて立っている。この家が少年 gang によって破壊しつくされるという話である。何故この家が破壊されるに至ったかの理由は色々ある。悪童共の遊び場所の近くにあったこと，ある日トマスが彼等にチョコレートをやったところ，それを自分の家に悪いことをしないようにする為の賄賂と解されたこと，新参者Tが大将のブラッキーにとって代る絶好の機会となったこと，又ブラッキーがこの壮挙によって新聞にかき立てられ，彼等一味の名声を高めようとしたこと，最後に，作者は書いていないが，戦争のなし得なかったことを自分達の手で完成しようとする意志が暗々裡に彼等に働いていると考えられる。とに角このギャング一味は今や総大将となった15才のTの指揮下にトマスの留守を狙って営々と Satan のように破壊作業にとりかかる。彼等は内部から「林檎の虫のように」侵蝕して行く方法をとる。途中で9才のマイクが昼食に家に帰ったり，教会に行って遅くなると云い出して，Tが当然の事として許す所をよんで我々はこの作業の性質が解って来る。彼等には家の持主への憎悪は全くない。興味のあるのは唯破壊丈だ。「破壊は結局一種の創造である」と作者は書いている。3日目の朝，駐車場へ車をとりに来た運転士は自分の貨物車と家がロープが結ばれていることを知らずに車をひき出す。轟然たる大音響と煉瓦の飛散，破壊は一瞬にして完成する。便所にとじこめられていたトマス老人を助け出してやり，煉瓦の山と化した彼の家の廃墟を見た時，運転士は腹を抱えて笑い出す。「あんたには悪いが，でも滑稽じゃないか」と。彼の哄笑は，人間性が見事な破壊という「創造」に送る拍手ではあるまいか？このようにユーモラスな筆につられて読んで来た読者は，最後にはっとして立止らざるを得ないのがグリーンの短篇である。

Across the Bridge も一見 comic で，時には farcical な相貌を呈する。アメリカとメキシコの国境リオ・グランデ河をはさんで二つの町がある。そのメキシコ側の町のホテルにキャロウエイ氏が泊っている。彼は英国人だが，会社を破産させその金を持ってここに逃亡中である。町の人々は彼を百万弗男と呼んでその事情を知っているが，本人は一向その事に気が付かない。スペイン語が全

然解らないからだ。彼は英国産セッターまがいの雑種犬を飼っているが，それは故国を思い出させる唯一の物であったからだ。そして正にその理由で逆に一日に一回この犬を蹴とばす癖を持っていた。この町へこの男を探しに二人の刑事が派遣されて来る。併し彼等のもっている古写真は今では口髭を生やし，ひどく老けているキャロウエイ氏とは大変違っている。そこで彼等三人が仲良く公園のベンチに坐って，それを町の人々が固唾を呑んで見物するという笑劇が起る。遂々刑事達も気が付くが，キャロウエイ氏の金をばらまいての裏面工作の為亡命者引渡命令が手に入らない。ところがキャロウエイ氏は妙な事で刑事達に復讐される。彼は多分盗まれた犬を探しにであろう，アメリカ側に渡ったが，そこで彼の犬をさけようとした刑事達の車に誤ってひき殺されてしまう。彼は息をひきとる前に片手をあげ，そしてそれを犬の首の上におろした。この動作は愛撫を意味したであろうか，それとも打とうとする身振りであったろうか。刑事達は前者をとり，「私」なる語り手は後者と解した。いずれにしても彼は「故郷の野原や溝や地平線に一番近いもの」である犬に最後の身振りをして死んだのだ。作者は末尾にこう書いている。「それは可笑しく又憐れであった。だが可笑しさはこの男が死んだからといって減るわけではなかった。死は喜劇を悲劇に変えはしない。そしてあの最後の身振りが愛情を示したものであるなら，それは人間の自己欺瞞の能力，即ち絶望よりもっともっと恐ろしい根拠なき楽天主義の例をここでも一つ示したものにすぎないと思う」と。我々は人間最後の愛情の身振りを「自己欺瞞」で「根拠なき楽天主義」とみるグリーンの眼に，又その思想に注目しなければならぬ。

戦争中に書かれた *When Greek Meets Greek* は愉快な喜劇である。フェニック氏は大学が軍に接収されているのを利用して姪のエリザベス等と共謀し St. Ambrose's College, Oxford といういかさま学校を作って通信教授を始める。ここに応募して来たのが Lord Driver でその息子のフレッドを入学させようというのだ。ところが，Lord Driver もさる者，Lord とは貴族の意でなく只の名前に過ぎず，その息子たるやボースタル感化院に収容されている顔に創痕のある若者である。併し通信教育という仕組みのお蔭で両詐欺師はお互に相手を巧く瞞していると思いこんでいる。間もなく「学長」と「貴族」は各々その姪と息子を何とかして結びつけようと努力するようになる。フレッドの卒業証書授与の日，若い二人は始めて顔を合せるが，そこでお互のインチキを打明けると同時に意気投合してしまう。ここから又新しい詐欺が始る。即ち二人はその父と叔父が二人を結婚させたがっているのを利用して，最大限に金を絞りとって結婚しようとする。彼等のなしている事は悪であるかもしれぬ。併しこの戦争下で行われる悪と較べて何と小さな悪であることか。グリーンはここで悪という不愉快なものから見事に喜劇を成立させている。この欺瞞の上に咲いた結婚が意外に健実で明朗に見えるのは何故であろうか？それは人間社会を一切悪と断じた時，より小さな悪が一種の善に似た効果を与えるからであろう。

グリーンが *Special Duties* でカソリックの一面を諷刺したことは前に触れた。*Jubilee* も又仔細に検討する時一種の諷刺であることが判る。往年の gigolo であって今は一文なしの50才のチャルフォント氏が，態々記念祭の時期の後を選んでピカデリーに出て，そこでエイミイと称する中年の女に逢い何もかも見すかされて，慰められ励まされるという話。この作品の重点はチャルフォント

氏ではなくエイミイにあるであろう。彼女は記念祭を利用して曖昧屋を経営し5千磅も儲けた腕のよい女である。おまけに，街の女を一個所に集めることにより「街を掃除」し，お国の為につくしたと自慢する女である。彼女は *Brighton Rock* のアイダのヴァリエイションである。今にもアイダのような宗教観を口に出しそうな女である。ここには「根拠なき楽天主義」をいだき，神の対蹠点に立つ人々が描かれている。

次に *The Case for the Defence* を諷刺と断ずるのは，それが人間の手で行う裁判が如何にいい加減なものであるかを示唆しているからである。殺人の被疑者は血走った出目をした頑丈な男で，彼が犯行の家から出て行くところを見た証人は4人もいる。彼の有罪は疑う余地がない程であるが，それが無事釈放されることになる。被告側弁護士が被疑者と双子で，全く同じ容貌，服装をしている男を法廷に立たせたからである。この異常な裁判の日は異常な結末を見た，と作者は云う。双子の一人が裁判所を出た後バスにひき殺されてしまうからだ。天罰？　しかし死んだのは果して殺人を犯した方であろうか，と作者は曖昧につけ加えている。双子の使用はグリーンの得意とする所であるが，ここでは余りに巧妙すぎて現実性に乏しい。だが人間の行なう裁判への不信という問題は依然として後に残る。

(6) 黒と灰色

今まで一度も言及しないで残された作品 *Brother* と *Men at Work* をこの項目に入れたいと思う。グリーンは *The Lost Childhood* の中で「人間性は黒と白ではなくて，黒と灰色である」と述べているが，これ程端的に彼の人間観を現わす言葉はない。この世には悪人と善人とがいるのでなく，悪人と半悪人がいる丈である。この世では善は実現されず，それは神の彼岸にのみ存在するのであり，カラマーゾフのアリョーシャの如き人物はグリーンの想像を絶するものであろう。若し善人とか，敬虔な人とかいってもてはやされる人間ありとすれば，それはグリーンに依って，人間性に無知な偽善者で「根拠なき楽天主義」者と極めつけられるであろう。かくしてグリーンの描く人間は悉く黒乃至灰色に塗りつぶされていて何処にも救いはない。否，唯一つ，神を指向することによって脱出の道があるのみである。筆者がこの小論で仮に分けた6つの項目も実はすべて「神」の問題に帰一出来る，と前に述べたのもこの意味に於てであった。

さて *Brother* はパリーに於ける共産党の暴動の一挿話とでも云うべきであろうか？　あるカフェーの亭主は最初共産党員達，次いで警官隊にふみこまれるが何れにも反撥を感ずる。併し最後に捕虜収容所からやっと逃げ出して来たが，姉にも去られて死んでいったドイツの若い男を前にして何物かにめざめる，という話である。作者の意図ははっきりしないが，要するに神なき人々の群が描き出されている。

Men at Work は戦時下の英国の「宣伝省」に働く人々にスポットライトを当てている。恐らくグリーンの関係した情報省の経験を語るものであろう。そこの機能は殆んど麻痺し，仕事は唯時間つぶしの手段となっている。そして会議は延々として続いて結論は出ない。暗澹としたロンドンの戦争下の官庁風景である。多分当時の作者のムードを語る作品であろう。

以上，グリーンの短篇を一通り検討して来た。その結論として我々は，短篇は長篇制作の「副産物」である，という彼の言葉を額面通り受取ってよいと思う。特に，長篇で述べ切れなかった問題を短篇で考えてみようとする *The Hint of an Explanation*，長篇の一部のヴァリエイションと見られる *Jubilee*, *A Drive in the Country* 等にその感が深い。併し短篇には短篇の特色と限界が存在する。グリーンも当然この事を意識していて色々工夫をこらしているのが感じられる。何等かの喜劇的ムードで一貫しようとした作品はその一例であろう。この場合には喜劇精神とグリーンの持つ人間観とが本来相容れないものである為，*Alas, Poor Maling* や *Across the Bridge* のようにチグハグな失敗作となることもある。滑稽味が成功するのは *When Greek Meets Greek* のように何等かの意味の救いがある場合か，或は *Special Duties* のように諷刺で終始する場合である。短篇の成否は主としてその短さを如何に利用するかにかかっている。作者の懐く信仰なり主張なりを説くのは短篇の任務ではない。作者はその片鱗をうかがわせればよい。この意味に於て *The Basement room* は力作であり乍ら佳作とは云い難い。又，*The Case for the Defence* は短篇の限界を意識しすぎて人工的になった。まして作者の主観によって黒く塗りつぶされた文で終る心理風景（例 *A Day Saved*）や人生挿話（例 *Brother*）は短篇小説としても読者を満足させるものではないだろう。グリーンの人間観，世界観に知識と理解をもつ読者にとって興味ある作品は勿論幾つもあるであろうが，若しそうした前提がない場合に彼の短篇が成功するのは，彼の信仰，主張が背後にかくれて渾然とした人生の vista を与えてくれる時である。即ち，*Jubilee*, *The Innocent*, *The Blue Film* 等である。

註　① 例えば The Strand Magazine 誌に掲載された *The News in English* はどの短篇集にも収録されていない。(cf. John Atkins : *Graham Greene*, p. 153)

② グリーン自身に次の言葉がある。

This then is the destiny that not only the young women affront — you must betray or, more fortunately perhaps, you must be betrayed. (Graham Greene : *The Portrait of a Lady*)

③ 『グリーンに於ける「裏切」』（島根農科大学研究報告第９号Ｂ）